

父親の育児不安に関する基礎的研究 V

—子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版の利用手引きの作成—

愛育相談所	安藤朗子・平岡雪雄・武島春乃
客員研究員	川井 尚・中村 敬
愛知教育大学	恒次欽也
武蔵野短期大学	酒井幸子
愛育ナーサリールーム	山川美恵子
愛育病院心理福祉室	小玉夕香・堤 道子・宮澤理恵
あんクリニック	永井桃子
東邦大学医療センター大橋病院	鈴木眞弓
(株) 保健同人社	加来華譽子
早稲田大学	大藪 泰
埼玉工業大学	馬岡清人
嘱託研究員	渡邊 寛・鈴木玲子(彩の子ネットワーク)・島 智久(浦安市教育委員会)
	伊藤嘉余子(埼玉大学)・山岡ティ(情報教育研究所)・木邨真美(名古屋大学)
	古賀浩子(名古屋大学)・栗原佳代子(東京大学)

要 約

今年度は、昨年度までの報告に基づき、これまでの本研究の集大成として子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版（以下、父親スクリーニング版）を作成し、その簡易的な手引きをまとめた結果を報告した。父親スクリーニング版を作成した目的は、母親と同様に育児不安を抱えた父親に対して、その育児不安の発生関連要因がどのようなものであるかを評価する資料とするためである。そして、本報告の主たる目的は、父親スクリーニング版の普及の促進、適切な利用をはかるための利用の手引きを作成することである。父親スクリーニング版は、領域Ⅰ.育児困難感タイプⅠ（育児への「自身のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」）、領域Ⅱ.育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」）、領域Ⅲ.父親自身の不安・抑うつ状態、領域Ⅳ.夫婦関係のあり方、の4領域（各5項目）と領域Ⅴ.個別の2項目、そして子どもの人数、子どもの異常の有無、母親（妻）の周産期の異常、等についての質問項目から構成されている。手引きには、1.沿革、2.質問紙の作成及び妥当性と信頼性、3.質問紙の使用手法、4.採点と利用にあたっての留意点が記載されている。この父親スクリーニング版が実際の相談場面において活用され、有用なスクリーニング検査となることが望まれる。今後は、実際の運用を進めたい。

キーワード：父親、育児不安、育児困難感、夫婦関係、スクリーニング版

A Fundamental Study on Child-Rearing Anxiety of Fathers V :
Development a brief manual for the screening version of JCFRI Child-Rearing Support Questionnaire
specifically targeting fathers.

Akiko ANDO, Yukio HIRAOA, Haruno TAKESHIMA, Hisashi KAWAI, Takashi NAKAMURA, Kinya TUNETUGU, Sachiko SAKAI, Mieko YAMAKAWA, Yuka KODAMA, Michiko TUTUMI, Rie MIYAZAWA, Momoko Fukumiya, Mayumi SUZUKI, Kayoko KAKU, Yasushi OYABU, Kiyoto UMAOKA, Yutaka WATANABE, Reiko SUZUKI, Tomohisa SHIMA, Kayoko ITO, Tei YAMAOKA, Mami KIMURA, Hiroko KOGA, Kayoko KURIHARA

Abstract : We developed a screening version of the JCFRI Child-Rearing Support Questionnaire specifically targeting fathers ("Father's Scale for the Screening Version"), and created a brief manual for it in 2012. We developed this scale to better understand how fathers experience the difficulties of child-rearing. The main purpose of the current study was to compile a manual for the Father's Scale to ensure its proper use and increase its popularity. The Father's Scale consists of five subscales with accompanying items (the number of children, children's disorders, and perinatal abnormalities). Subscale 1 covers the feeling that child-rearing is difficult; this feeling is divided into two types. Type I includes lack of confidence, anxiety, embarrassment, and feeling unqualified to be a father. Type II covers negative feelings and aggressive and impulsive behavior toward the child. The second type is covered under Subscale 2. Subscale 3 covers the father's feelings of anxiety or depression. Subscale 4 covers the marital relationship. Subscale 5 covers two items. Included in the brief manual were (1) background, (2) the process of developing the scale and its validity and reliability, (3) method of use, and (4) grading instructions and additional important information. We hope that the Father's Scale for the Screening Version will be utilized in actual consultation situations, and become a useful screening scale, and we intend to advocate its use for research on child-rearing in the future.

Keywords: Father, Child-Rearing Anxiety, Difficulties of child-rearing, Marital relationship, Screening version

I. 研究目的

われわれは、母親の育児不安の本態を明らかにすることにより子育てにつまずいている母親たちへの適切な援助につながると考え、子ども総研式育児支援質問紙¹⁾を作成、市販することができた。一方、子どもへの虐待事例において父親が関与することがしばしばであり、また、その結果がもたらすものはきわめて子どもにとって悲惨なものとなることもある。また、虐待にとどまらず、父親が子どもへの対応に困難を抱え苦慮していることはわれわれの日常的な相談事例においても明らかであり、父親も育児不安を抱えていることが推測された。そこで、本チーム研究においては、父親の育児不安心性について検討してきた^{2)~5)}。そして、父親にも母親同様の育児困難感を抱えていることが明らかにされた。さらにこの育児困難感の発生に関連する、例えば父親の心身状態、家庭機能、妻・母親の心身状態等の背景要因を適確に評定できれば、それを手がかりに父親への適切な援助が可能であるという臨床的観点から、資料を収集し、分析してきた。従来より、育児不安を抱える母親の面接を通して、日頃感じることは、母親自身の心身の問題もあるが、むしろ、それだけではなく、家庭内の問題、とりわけ、父親の役割機能の低下、あるいは役割の放棄、子どもの示すさまざまな問題行動に対応できないことなど、多様な要因によって育児困難感が強まっていることである。そして、そのことは母親にとどまらず父親においても同様であることを示してきた。そこで、どのような要因が父親の育児に困難をもたらすのかを適切に評価する資料が必要であると考えられた。このことによって、母親だけでなく育児不安を抱く父親に対する子育て支援のための相談等を行うことができるものとする。

本質問紙はこの役割を果たしうるものとして考案され、「子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版」として作成した。母親版はすでに「子ども総研式・育児支援質問紙」として市販されている。父親版は、後述するように、研究当初は全体で計130項目前後（子どもの年齢によって多少異なる）の質問紙を作成したが、父親の場合、なかなか数多くの質問項目からなる質問紙への協力が得にくいと推測されたため、かなり短縮した形にし、今回スクリーニング版として報告することにした。また、母親も同様のスクリーニング版を作成できる段階にあるもののそれを見合わせたのは、「子ども総研式・育児支援質問紙」として市販されているために屋上屋を架す愚を避けるために他ならない。

本報告の主たる目的は本質問紙の普及の促進、適切な利用をはかるための「利用の手引き」を作成することである。

II. 手引きの作成

1. 手引き作成の目的

上述のように、子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版は通算5年に及ぶ検討の末に完成版が作成された。そこで、本質問紙の使用にあたっての手引き（暫定的）を作成することにした。それは、本質問紙をわれわれの作成意図の理解のもとに利用する必要があると考えたからである。その作成意図については、前節で述べたので省略する。

2. 手引きの構成

本手引きの構成は1. 沿革、2. 質問紙の作成及び妥当性と信頼性、3. 質問紙の使用法、4. 採点と利用にあたっての留意点、である。

III. 手引き

1. 沿革

われわれは、かつて日本子ども家庭総合研究所（旧日本総合愛育研究所）のチーム研究「育児不安に関する臨床的研究」（研究代表 川井 尚 同研究所・愛育相談所）^{6)~13)}を1994年から開始し、7年間にわたる研究成果により、育児困難感のプロフィール評定質問紙をまとめ、それに基づいて「子ども総研式・育児支援質問紙」（ミレニウム版）を作成し、市販することができた（川井他, 2000）。

この質問紙を作成した目的は保健（福祉）センター・保健所・小児科外来・子育て支援センター・保育所等での育児相談の際、母親がどの程度、育児に困難を感じているか評定すると共に、第1に母親への援助の必要性を判断する目安の一つとして利用することである。そして、第2に、母親の抱える育児の問題点をより明確にし、母親とその家族の育児を支援するための指針を得て適切な相談をすすめていくことにあった。その詳細な研究のプロセスは日本子ども家庭総合研究所紀要（一部は旧誌名日本総合愛育研究所紀要）に報告したものを参照されたい。

その後、父親・男性研究^{14)~19)}をスタートさせ、ある程度、父親・男性のありかたに関する研究をすすめることができた。この一連の研究や研究メンバーの日々の心理臨床体験を通して父親にも育児不安ともいえるものがあることを明らかにしてきた。そこで父親と母親との育児不安の本態とその相違はどこにあるのかを検討し、基本的な構造、育児困難感の父親にも母親にも共通して認められるなどの、ある程度の知見を得ることができた。

2. 質問紙の作成及び妥当性と信頼性

1) 調査項目の選定

これまでの「父親・男性研究」と「母親の育児不安研

究」の知見を取り入れ、父親と母親の育児不安とその発生関連要因についての項目を作成し、その予備調査を行った。

項目について：上記にあげた先行研究を参考に、調査項目を選定した。一連の「父親・男性研究」から、父性や夫・男性性に問題があるときは子育てに影響があることや、また、父性や男性性、自分自身は自分の親との関係があり、それがまた、子育てに影響していることがわかっており、これらをふまえた項目群を選んだ。

なお、父親版と、母親版とを作成した。父親版と母親版の両方を作成した理由は目的でもふれたが、夫婦に実施することにより両親（夫婦）間の比較検討ができること、及びそれぞれの育児不安心性とその発生関連要因の分析が可能になると考えられる。しかし、先にも述べたようにスクリーニング版としては父親版のみ作成することにした。

この質問紙は、領域Ⅰ：育児に関する 22 項目、領域Ⅱ：妻に関する 18 項目、領域Ⅲ：家族に関する 15 項目、領域Ⅳ：父親自身の心身状態に関する 28 項目、領域Ⅴ：妻の心身状態に関する 25 項目、領域Ⅵ：乳児期に関する 8 項目、領域Ⅶ：a. 0 歳児の心身状態に関する 12 項目、b. 1 歳児の心身状態に関する 16 項目、c. 2 歳児の心身状態に関する 21 項目、d. 3 から 6 歳児の心身状態に関する 25 項目、から成る。

なお、領域Ⅶは、質問紙内の注意書きにおいて「お子さんが赤ちゃんのとき（生まれてから半年ぐらいまで。ただし、お子さんが複数いる場合は、下の年齢のお子さんについて回答してください。）」とした。領域Ⅶは、同様に質問紙内に「お子さんについて（注：現在のお子さんの年齢に応じて回答してください。お子さんが二人いて A 児が 0 歳児、B 児が 3 歳児ならば、0 歳児と 3 歳児の両方に答えてください。0 歳児、1 歳児、2 歳児がいればそれぞれについて答えてください。ただし、3～6 歳の年齢のお子さんが複数いる場合は、最年少のお子さんについて回答してください。）」としてそれぞれ回答を求めた。したがって、領域Ⅶは子どもの年齢によっては無回答項目が生じることになる。

2) 調査対象者とその属性

対象地域は東京都、埼玉県、大阪府、京都府などである。配布は乳幼児健診、保育園、幼稚園、子育てサークルなどを中心にその他、われわれ研究メンバーの関係施設等から回収した。夫婦にはそれぞれ個別に回答するように求め、それぞれ別の封筒に封入してそれをさらに一つの封筒に入れて、施設を通して、または希望により郵送により回収した。なお、分析は両親のデータがそろっているものを主たる資料とした。配布数は 3845 件、内両親のペアがそろっているもの 1936 件（回収率 50.4%）であった。

実際の分析の対象は 0 歳～7 歳未満の子どもをもつ父親と母親を対象とした。質問紙の配布数は 3845 件、内両親のペアがそろっている分析有効対象数は、1900 組（有効回収率 49.4%）であった。本報告ではペアがそろっている父親版の資料のみを用いている。

3) 整理方法

本報告に関わる分析方法について簡単に述べたい。領域ⅠからⅦまでの各項目に関してポジティブである場合に得点が低くなる項目は、「はい」1, 「ややはい」2, 「ややいいえ」3, 「いいえ」4 と得点化した。逆に、回答がネガティブなほど得点が高くなる項目（逆転項目）はデータ変換し、「はい」4, 「ややはい」3, 「ややいいえ」2, 「いいえ」1 と得点化した。したがって、領域の合計点は項目の得点が高いほど、その領域のネガティブ度が高いことになる。

- a. 領域ごとに信頼性係数（クロンバックの α 係数）を求めた。
- b. 信頼性係数に大きな問題がなかった（結果の項で述べる）ので、領域合計点を求めて、領域間の相関関係を求めた。
- c. さらに、因子分析を行い、どのような因子で構成されているか、とりわけ、育児不安の心性にかかわるような因子が抽出されるか否かの検討を行った。1 回目の結果、抽出された因子とそれを構成する項目群に基づき 2 回目を実施した。
- d. 2 回目の結果に基づき、因子内の内的整合性をクロンバックのアルファ係数により、また、因子間の関係を相関係数により検討した。
- e. 父親版の育児不安尺度（スクリーニング版）の作成については、上に述べた属性と育児困難感との関係、ならびに重回帰分析、並びに因子分析の結果（重回帰分析によって育児困難感に影響を与えている因子から因子得点の高い項目を上位 5 項目まで選択する。）に基づいて項目を作成し、育児支援スクリーニング版を作成した。これらについての内的整合性、信頼性分析を行った。

4) 倫理的配慮

本調査の実施に当たり、各地域の小児科等の医療機関、幼稚園、保育所、子育てグループの責任者、及び調査対象である父親、母親に対し本研究の目的、研究方法の他、無記名回答であること、回答拒否が自由であること、個人情報保護のための配慮がなされること、回答をもって本研究に同意したことになること、本研究の目的以外にデータを使用しないことなどを依頼文書及び質問調査票に明記した。

また、研究計画の段階で、日本子ども家庭総合研究所・研究倫理委員会に審査を求め承認を得た。

5) 父親育児支援評定尺度スクリーニング版(末尾の付録参照)の作成過程

a. 妥当性

因子的妥当性を検討するために、領域Ⅰから領域Ⅵまでの因子分析を行った。方法は最尤法でバリマックス回転させた。スクリープロットや説明された分散などから第7因子まで抽出した。1回目の因子分析に基づき項目の削除等を行い、1回目の因子分析で因子を構成する項目93項目のみで2回目の因子分析を行った。手法は1回目と2回目ともに同じであり、この結果、1回目の因子分析によって得られた因子や項目は2回目もほとんど共通であり、ごく一部のみが他の因子に現れたり、他の因子に共通していたものが単独になったりという6項目だけに異同がみとめられたに過ぎない。したがって、因子を構成する項目はほとんど同じといってよい。これをうけて因子の命名等は上記の1回目と同じものを採用することにした。それは、第1因子「妻の不安・抑うつ状態」第2因子「父親の不安・抑うつ状態」第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」第4因子「Difficult Baby」第5因子「育児困難感タイプⅠ」(育児不安心性1)第6因子「育児困難感タイプⅡ」(育児不安心性2)第7因子「自分自身の親子関係」である。

これらの資料に基づき重回帰分析によって育児困難感に影響を与えている因子から因子得点の高い項目を上位5項目まで選択した。これによって抽出された因子は、「育児困難感タイプⅠ」、「育児困難感タイプⅡ」、「父親自身の不安・抑うつ状態」であり、これに後述する理由により「夫婦関係のあり方」を加えた。さらに、重要と思われた2項目を加えて質問紙を構成することにした。即ちスクリーニング版は、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」、領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」、領域Ⅴ：個別の2項目(「子育てに悩んだときに相談できる人がいる」「妻は子どもとよく遊び、面倒見がよい」)で構成されている。そして、各領域について単純加算をし、その各領域について上位10パーセンタイル値を求め、このスコア以上の場合にハイリスクであると定義した。

通常、他検査との相関関係の高さを妥当性としてあげられる場合も多いが、本質問紙は独自の検討に基づいて作成されたものであるためこれに相応する検査との比較はできないと考える。

b. 信頼性

領域ごとに、内的一貫性を検討するためにクロンバックの係数を求めた。また、内的整合性を確認するために各領域の項目の合計点と各項目とのピアソン相関係数を求めた。なお、領域Ⅴは個別に加えた項目であるため分析から除いた。

領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」

父Ⅱ 育児: 2 子どものことでどうしたらよいかわからな

い

父Ⅱ 育児: 1 育児に自信が持てない

父Ⅱ 育児: 4 どのようにしつければよいかわからない

父Ⅱ 育児: 6 子育てに困難を感じる

父Ⅱ 育児: 5 父親として不適格と感じる

クロンバックの信頼性分析で.859 と高い値が得られた。内的整合性は.782 から.857 と高い値が得られた。

領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」

父Ⅱ 育児: 1 4 とめどなく叱ってしまう

父Ⅱ 育児: 1 3 子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう

父Ⅱ 育児: 1 2 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む

父Ⅱ 育児: 1 5 子どものことを許せない

父Ⅱ 育児: 1 0 子どもを虐待しているのではないかと思う

クロンバックの信頼性分析で.736 とある程度高い値が得られた。内的整合性は.559 から.781 と高い値が得られた。

領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」

父Ⅳ 自身: 5 精神的に不調である

父Ⅳ 自身: 1 3 沈みがち

父Ⅳ 自身: 2 不安や恐怖感におそわれる

父Ⅳ 自身: 3 悲観的になりやすい

父Ⅳ 自身: 1 気が滅入る

クロンバックの信頼性分析で.908 と高い値が得られた。内的整合性は.847 から.864 と高い値が得られた。

領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」

なお、夫婦関係は父親版の因子分析では得られなかったものであるけれども夫婦関係は重要な領域でもあり、母親との比較を考慮に入れて加えた。

父Ⅱ 妻: 8 妻と気持ちが通じ合っている

父Ⅲ 家族: 1 家族としてのまとまりを感じる

父Ⅴ 妻: 2 4 妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く

父Ⅴ 妻: 2 5 妻が子育てに悩んでいるときは精神的に支えるようにしている

父Ⅳ 自身: 2 4 男として家族を守り支えとなっている

クロンバックの信頼性分析で.803 と十分な値が得られた。従って信頼性分析では高い結果が得られたのでこの領域として得点化することは問題がないと考える。

内的整合性は.688 から.785 と高い値が得られた。

3. 質問紙の使用法

1) 対象年齢

スクリーニング検査は該当する年齢(0歳から7歳未満)に応じた児を有する父親に適用する。きょうだいがいる場合は、健診や相談の対象児を該当年齢児とする。年齢対象外の質問紙の適用は検査結果を歪めるので使用

しない。

2) 検査方法

実施は乳幼児健診の場合は待ち時間を利用したり、健診書類とともに郵送して事前に回答し回収するという方法もある。ただし、全員実施は、臨床的研究等、何らかの理由や目的がない限りは対象者に余分な負担をかけるので望ましくない。問診時に母親から子育てに悩んでいるという訴えがある場合には母親を通して後日父親に回答を求める。また、問診の際の母親や児の様子をみて何らかの問題を抱えていると思われる場合にもやはり後日父親に回答を求めることが望ましい。なお、その時点で実施を拒む場合にはその後のフォローアップ時に実施する。もちろん、父親と一緒に来ている場合にはその場で実施するとよい。なお、母親に関しては、すでに市販している子ども総研式・育児支援質問紙を実施することが望まれる。

回答にはおよそ10分程度を要する。回答していない項目があると適確な評定をし難いので面接時などに確認してできるだけ全項目回答が望まれる。もし、無効回答や未記入があった場合には暫定的な判断にとどまる。その旨を所見票に必ず記載する。なお、無回答が多い場合は、回答拒否によるものか、評価対象となる妻がいないことによるものか（離婚や死別などこの場合は妻に関わる項目のみ無回答になっていることもあれば質問紙全体を拒否することもある）、時間の制約にともなうものか、知的な問題によるのかなど、注意し判断する必要がある。回答拒否による場合は何らかの問題を抱えている可能性があり、問診時に注意深い観察を要する。

妻がいない場合は単親家庭としてその旨を所見票に記入して、育児困難感を中心に父親自身にかかわる領域を検討することになる。

3) 質問紙の利用者

臨床場面で実施する場合は乳幼児を持つ父親や母親と接する場にいる、心理相談員（臨床心理士など）、保健師、保育士、小児科医師（認定医）、幼稚園教諭などが行う。ただし、父親面接ができない（臨床経験がない）場合には、心理面接ができる体制を整えておくこと（精神科医や心理相談員・臨床心理士へつなぐこと）が必要である。興味本位の実施は避けなければならない。また、実施結果はできるだけ、対象者に伝えることが望ましいし、もちろん、個人情報第三者に漏れることのないように所見票等の管理をきちんとしなければならない。

研究で利用する場合、事後の面接等ができないならば、無記名の一般的なアンケートの位置づけで実施した方がよい。

4. 採点と利用にあたっての留意点

1) 採点

a. 領域ⅠからⅣごとに得点を求める。はい（4点）、や

やはい（3点）、ややいいえ（2点）、いいえ（1点）として単純加算する。

領域Ⅴの2項目は重要な質問項目として追加したものである。これは得点化はしないもののネガティブな回答である場合には注意を要するものである。

b. ただし、領域ⅣとⅤの質問項目は逆転項目なので、はい（1点）、ややはい（2点）、ややいいえ（3点）、いいえ（4点）として単純加算する。すなわち、得点が高いほどネガティブとなる。

c. 各領域ごとに下記の表に結果をまとめる。

各領域のスコアの育児困難感得点が上位10パーセンタイル以上である場合には何らかのフォローが必要であると考えている。いずれもその領域においてハイリスクな状況にあると考えて良い。育児困難感だけでなく各領域もハイリスクにあるならば家庭の危機としてとらえる必要があり、子どもへの虐待等を考慮しておく必要があり、ていねいなフォローアップを要する。

領域Ⅰ「父親の育児困難感タイプⅠ」は14点以上（得点は最低4点から最高20点、以下同様）、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」は11点以上、領域Ⅲ「父親の自身の不安・抑うつ」は14点以上、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」は13点以上である。

表1 整理表

	基準点	各領域点
領域Ⅰ 育児困難感タイプⅠ	14点	
領域Ⅱ 育児困難感タイプⅡ	11点	
領域Ⅲ 父親自身の不安・抑うつ状態	14点	
領域Ⅳ 夫婦関係のあり方	13点	

注：領域Ⅴの2項目は重要な質問項目として追加したものである。これは得点化しないもののネガティブな回答である場合には注意を要するものである。

2) 利用にあたっての留意点

a. 領域Ⅰ及びⅡの育児困難感得点が高い場合には育児に関してハイリスクであるので心理相談、発達相談等の個別相談、あるいは保健師等の相談の状況により専門機関への紹介等を行う。

b. 領域Ⅲ及びⅣの得点がハイリスクである場合には家庭内においてさまざまなトラブルが生じている可能性が高いといえる。上記同様に保健指導等にあたって留意しながら面接を進めていく必要がある。

c. とりわけ育児困難感得点もハイリスクである場合には子どもへの虐待等に留意しながら面接等を慎重に行っていく必要がある。

d. 子育てに悩んだときに相談できる人がいる（項目No.21）、妻は子どもとよく遊び面倒見がよい（項目No.22）、子どもの人数、子どもの異常の有無、母親（妻）の周産期の異常、この5項目は育児困難感に影響を与える

ハイリスク要因として面接等において考慮に入れるべき視点であるといえる。

IV. まとめ

父親による子どもへの虐待にかかわる報道が数多くなされているが、その個々の事例における原因や要因は複雑で単一なものではない。そこには虐待に至る心性があり、その一部は本スクリーニング版によりある程度は予測される範囲のものではないかと考える。したがって、心理相談員（臨床心理士など）、保健師、保育士、小児科医師（認定医）、幼稚園教諭などが関わる現場でスクリーニング検査として活用され、それが専門機関等への相談につながるならば、有用な検査の一つになるものと考えられる。また、既刊の母親版である「子ども総研式・育児支援質問紙」とともに活用されれば、さらに家族全体の課題等が立体的に浮かび上がるものと考えられ、両者の併用が望まれる。

実際の保健指導等において臨床的に有用であるスクリーニング検査として用いられるならば幸いである。

さらに、母親版に関しては今後、こうした機会が得られるならば報告したいと考えている。

付記：本研究の子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版について、無断使用はご遠慮ください。もし、臨床あるいは研究のために利用される場合には、研究代表の安藤までお申し出ください。

謝 辞 本研究をすすめるに当たりご協力いただいた各地域の小児科等医療機関、保育園、幼稚園の先生方、子育てサークルのリーダーの方々、そしてお父さん、お母さんたちに深く謝意を表したい。

文献：

- 1) 日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著. 母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」(0~11ヶ月, 1歳児用, 2歳児用, 3~6歳児用). 「子ども総研式・育児支援質問紙の利用手引き」. 2002
- 2) 川井 尚・安藤朗子・武島春乃・他. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅰ—今後の父親育児不安尺度作成に向けての予備的分析—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第44集; 257-290. 2008
- 3) 安藤朗子・川井 尚・武島春乃・他. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅱ—父親育児困難感発生関連要因及び父親・母親の自由記述の比較検討—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第45集; 285-294. 2009
- 4) 安藤朗子・川井 尚・武島春乃・他. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅲ—母親版との比較検討—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第46集; 231-246. 2010
- 5) 安藤朗子・平岡雪雄・武島春乃・他. 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅳ—父親の育児不安尺度の作成に向けて: 対象者の属性や育児困難感発生関連要因の検討—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第47集; 303-315. 2011
- 6) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する基礎的検討. 日本総合愛育研究所紀要. 第30集; 27-39. 1994.
- 7) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究—幼児の母親を対象に—. 日本総合愛育研究所紀要. 第31集; 27-42. 1995.
- 8) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅱ—育児不安の本態としての育児困難感について—. 日本総合愛育研究所紀要. 第32集; 29-47. 1996.
- 9) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅲ—育児困難感のアセスメント作成の試み—. 日本総合愛育研究所紀要. 第33集; 35-56. 1997.
- 10) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ—育児困難感のプロフィール評定試案—. 日本子ども家庭総合研究所紀要(旧誌名日本愛育総合研究所紀要). 第34集; 93-111. 1998.
- 11) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ—育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第35集; 109-143. 1999.
- 12) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅵ—育児困難感のプロフィール評定試案—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第36集; 109-143. 2000.
- 13) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅶ—子ども総研・育児支援質問紙(ミレニアム版)の手引きの作成—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第37集; 159-180. 2001.
- 14) 川井 尚・庄司順一・安藤朗子・他. 父親・男性研究Ⅰ—父親用文章完成法(F・SCT)の作成—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第38集; 203-215. 2002.
- 15) 川井 尚・庄司順一・安藤朗子・他. 父親・男性研究Ⅱ—両親の回答比較から—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第39集; 237-251. 2003.
- 16) 川井 尚・安藤朗子・武島春乃・他. 父親・男性研究Ⅲ—F・SCT(父親用文章完成法)による検討—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第40集; 165-187. 2004.
- 17) 川井 尚・安藤朗子・武島春乃・他. 父親・男性研究Ⅳ—M・SCT(母親用文章完成法)による検討 F・

- SCT（父親用）との比較を含めて－．日本子ども家庭総合研究所紀要．第41集；175-201．2005．
- 18) 川井 尚・安藤朗子・武島春乃・他．父親・男性研究Ⅴ－父親の役割に関する基礎的研究－母親の役割とも比較して－．日本子ども家庭総合研究所紀要．第42集；177-194．2006．
 - 19) 川井 尚・安藤朗子・武島春乃・他．父親・男性研究Ⅵ－父親・夫・男性の基本的役割と今後の父親育児不安研究に向けて．日本子ども家庭総合研究所紀要．第43集；203-242．2007．
 - 20) 牧野カツコ．乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安＞．家庭教育研究所紀要．(3)．小平記念会家庭教育研究所；35-36．1982
 - 21) 川井 尚・庄司順一・横井茂夫・他．育児における父親の役割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ．厚生省心身障害研究「高齢化 社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」（平山宗宏主任研究者）平成元年，2年，3年度報告書．1990-1992．
 - 22) 川井 尚．育児における父親の役割．小児保健研究．51(6)；671-680．1992
 - 23) 二木 武監訳．ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地．医歯薬出版株式会社．1993
 - 24) 川井 尚・庄司順一・恒次欽也・他．育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」（日暮 眞主任研究者）平成4年，5年，6年度報告書．1993-1995．
 - 25) 恒次欽也・庄司順一・川井 尚．いわゆる育児不安に関する調査研究（1）－「育児困難感」の規定要因に関する研究－．愛知教育大学研究報告．第48輯（教育科学）；123-129．1999．
 - 26) 川井 尚．父親面接．心と体の健診ガイドー幼児編ー．日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会編．日本小児医事出版社．57-60．2000
 - 27) 恒次欽也・庄司順一・川井 尚．いわゆる育児不安に関する調査研究（2）－新資料による「育児困難感」の規定要因に関する研究－．愛知教育大学研究報告．第49輯（教育科学）；123-129．2000．
 - 28) 厚生労働省 子ども・子育て応援プラン．2005
 - 29) ベネッセ次世代育成研究所．第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査報告書（妊娠期～0歳児期）．2009
 - 30) 日本子ども家庭総合研究所編．子ども資料年鑑2010．KTC 中央出版．2010

実施年月日：平成____年____月____日

お子さんの名前：____（男・女）平成____年____月____日生 満____歳____ヶ月

保護者の名前：＜父親＞____（____歳）＜母親＞____（____歳）

現住所：_____

連絡先電話番号：____（____）____ FAX：____（____）____

家族構成：_____

主な心配：

相談所見：

今後の対応：

相談機関名：_____ 担当者名：_____

結果の整理：

1. 領域ごとに得点を求める。はい（4点）、ややはい（3点）、ややいいえ（2点）、いいえ（1点）として単純加算する。
2. ただし、質問項目のうち領域ⅣとⅤの項目は逆転項目なので、はい（1点）、ややはい（2点）、ややいいえ（3点）、いいえ（4点）として単純加算する。すなわち、得点が高いほどネガティブとなる。
3. 各領域ごとに下記の表に結果をまとめる。
質問票の領域Ⅰ父親の育児困難感タイプⅠは14点以上、領域Ⅱ同タイプⅡは11点以上、領域Ⅲ父親の自身の不安・抑うつは14点以上、領域Ⅳ父親の夫婦関係は13点以上がハイリスクとなる。なお、各領域の得点は最低4点から最高20点の範囲である。

整理表

	基準点	各領域点
領域Ⅰ 育児困難感タイプⅠ	14点	
領域Ⅱ 育児困難感タイプⅡ	11点	
領域Ⅲ 父親自身の不安・抑うつ状態	14点	
領域Ⅳ 夫婦関係のあり方	13点	

注：領域Ⅴの2項目は重要な質問項目として追加したものである。これは得点化はしないもののネガティブな回答である場合には注意を要するものである。

結果の解釈：

1. 育児困難感得点が高い場合には、育児に関してハイリスクであるので、心理相談、発達相談等の個別相談、あるいは保健師等の相談の状況により専門機関への紹介等を行う。
2. 他の領域の得点がハイリスクである場合には、家庭内においてさまざまなトラブルが生じている可能性が高いといえる。上記同様に保健指導等にあたって留意しながら面接を進めていく必要がある。
3. とりわけ育児困難感得点もハイリスクである場合には、子どもへの虐待等に留意しながら面接等を慎重に行っていく必要がある。

子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版の利用手引き
（日本子ども家庭総合研究所・第48集（2011年度）・紀要版）

著者代表： 安藤 朗子（日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所）
ando@aiiku.or.jp

2012年 3月31日 第1版発行

連絡先： 日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所
〒106-8580 東京都港区南麻布5-6-8
電話：03（3473）8311
FAX：03（3473）8408
Copyright2012

- ・本手引き書、および質問紙は著作権上の保護を受けています。本手引き書、及び質問紙の一部あるいは全部について、上記著者代表からの文書による許諾を得ずに、いかなる方法によっても無断で複写・複製することは禁じられています。
- ・本手引き書、および質問紙に関するご質問は、上記の連絡先にお問い合わせください。

付記：本研究の子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版について、無断使用はご遠慮ください。もし、研究のために利用される場合には、研究代表の安藤朗子までお申し出ください。

謝 辞：本研究をすすめるに当たりご協力いただいた、保育園（所）、幼稚園の先生方、保健（福祉）センター・保健所の保健師、そしてお父さん、お母さんたちに深く謝意を表したい。